

開催地名	北海道新冠町
開催日時	令和8年2月15日（日） 10:00 ～ 11:30
開催場所	新冠町レ・コード館研修室
語り部	鈴木 典行（宮城県石巻市）
参加者	新冠町職員、地域住民、町内会自主防災組織 他 約100人
開催経緯	昨年は津波警報が2回あり住民・職員の意識も変わったが、時間の経過や警報でも津波が来ないなどにより意識が薄れてしまうことから、講演を機に今日からの防災に役立てられるきっかけになればいいと思う。
内容	<p>(1)はじめに</p> <p>私は生まれも育ちも宮城県石巻市である。東日本大震災発災直後から大川小学校に行き捜索をし、被災した沢山の子供たちを抱き上げてきた。その中に自分の娘もいて自分の手で土の中から抱き上げた。その時の様子は言葉には表せない残酷な状態であった。</p> <p>何度も大川小学校へ足を運ぶ中で多くの人と出会い、少しずつ「ここで何があったのか」を話すことができるようになった。その後、ロードバイクを始め被災地を巡る中で全国に仲間ができ、現在は会社員として働きながら、語り部ガイドや講演会、オンライン配信など多様な方法で伝承活動を行っている。本日は、大川小学校で何が起きたのか、そしてどうすべきかについてお話する。皆さんの心に少しでも残り、防災意識につながればと考えている。私は3.11を原点に、学び、考え、伝えるという意識で活動を続けてきた。大川小学校で起きた出来事は一地域の問題ではなく、全国で起こりうることである。</p> <p>(2)当時の被災状況と現在</p> <p>東日本大震災は北海道から九州まで揺れた巨大地震だが、10メートルを超える津波は多くの地域が未経験である。しかし「来るかもしれない」「万が一、もしかして」と考えてほしい。私には、中学2年、小学6年、保育所に通う3人の娘がいた。そのうち小学6年生の次女は大川小学校に通っており、学校で犠牲となった。さらに妻の両親、甥、姪を含め計5人の家族を失った。大川小学校があるのは、三陸特有のリアス海岸の入り組んだ海から直線で3.7キロの場所であった。かつて、大川小学校周辺には150軒、約500人が暮らす町があったが津波で消失。現在は非居住地域となり、農業利用のみが認められている。大川小学校では児童74名、教職員10名が亡くなった。また、学校の校舎は震災遺構として残された。他の遺構と異なるのは、校舎内部に入れない点である。存置保存として手を加えず15年前の姿のまま維持されている。しかし</p>

年月とともに劣化が進み、市へ保護を要望した。修復ではなく保護として、穴を塞ぐ、動物侵入を防ぐなど最小限の対応が進められている。コウモリやスズメの侵入、風雨による損傷などへの対策である。壊れた校舎が存在すること自体が強い意味を持ち、語り部活動の場として重要な役割を果たしている。

(3) 学校防災のあり方

大川小学校が取り上げられる理由は、学校管理下で多くの児童と教職員が亡くなったことにある。学校防災の在り方を考える象徴的事例となった。現在、宮城県では新任の校長は必ず大川小学校で研修を受けることになっており、教員研修の場として活用されている。事実を率直に感じ子どもと向き合うことが目的である。

震災前の学校では、お花見給食や運動会が行われるなど、どこにでもある日常の光景があった。しかし、津波により校舎は数分で破壊された。津波の威力がいかにも恐ろしいかが分かる。次女は震災の翌週3月18日に大川小学校での卒業式を控えており、着物姿で前撮りも行っていたが、その写真は残念ながら遺影となってしまった。「行ってきます」と言ったまま、「ただいま」を言わずに。防災とは家を出て帰るまで子供たちを守ることだと考えるようになった。

(4) 津波がもたらした被害

通信も途絶え情報は得られず、橋や堤防も決壊し移動手段もなかったため、私が学校に来たのは3月13日だった。自宅へ向かうと家は残っていたが娘がいない。学校へ向かうと町は消えており、「大川小学校孤立」との報道を信じていたが、状況との違いから現実を知った。到着時には校庭に多くの遺体があった。しかし、当日の写真には遺体は写っておらず、検証で津波は7回到達し多くの物や人が流れ着いていたこと、最後の大きな津波が20時頃まで続いたことが分かった。避難後せっかく助かったのに自宅へ戻り、後続波により亡くなった方が沢山いた。警報が解除されるまでは戻ってはいけない、また来るものと思っしてほしい。大川小学校に到達した津波は川を遡上したものである。海岸の10万本の松が流木となって橋に引っかかり水をせき止め、川からあふれた津波が町へ先に到達し、その後陸を遡上した津波と重なり渦となって町を破壊した。結果として残ったのは学校と病院のみであった。後の検証では津波は3.7km遡上し高さ8.6mに達していたこと、学校での行動や津波に遭った場所も明確になってきた。

(5) 発災後に学校が判断した避難行動

地震は14時46分に発生し、揺れは3分以上続いた。私の会社では物が落ち続けた。学校では子どもたちが机の下で身を守り、その後校庭へ避難した。6年生は教務主任の指示で一度裏山へ向かったが途中で別の教師の指示で戻され、校庭で点呼を取り待機した。氷点下1～2度の寒さの中で体調を崩す子どももおり、教師間では校庭待機か山への避難かで意見が分かれたが、「ここでも大丈夫」と判断された。しかし6メートルの津波警報が出ており、海拔約1メートルの校庭は危険であった。ある児童が「ここにいたら死んでしまう。山に行こう」と先生に訴えたが受け入れられず、黙っていると叱責され子供たちは泣きながら待機するしかなかった。状況が動いたのは行政の広報車が津波を目視し避難を呼びかけたことがきっかけである。教頭は住民と相談し三角地帯への避難を決めたが、本来離れるべき川側へ向かう判断となった。子どもたちは「急げ」と移動したが経路は行き止まりで、先頭の5年生2名が方向転換した時には津波が迫っていた。急斜面を登ろうとした2名は津波に押し上げられ奇跡的に生存し、もう1名は冷蔵庫につかまって助かった。多くの児童と教師は移動途中で津波の犠牲となり、4名の生徒はいまだ行方不明である。津波到達は15時37分で、地震から51分あったにもかかわらず高台へ避難できなかった。校庭の出口は幅70センチで1人ずつしか通れず、遊具や段差もあり迅速な移動は困難だった。検証では移動開始から1分後に津波が到達し、1分で150メートルしか進んでいなかったことから、約50分校庭に留まっていたことが分かっている。

(6) その後の捜索と検証から見えた課題と教訓

3月13日、山裾で子どもたちを見つけた。他の父親たちや地元消防団に声をかけ共に捜索を行った。道具を捨てて手で土を掘ると小さな手や足が現れ、子どもたちを1人ずつ抱き上げた。多くは知っている子どもたちだった。姉妹で抱き合っていたり、友達同士で手をつないだまま埋まっていたりした。捜索終了となったが腑に落ちず、作業を始めると小さな足が見えた。靴のかかとに名前が書いてあり、それは自分の娘であった。その時のことを言葉に出すのは難しい。その後も毎日現場に通い、子どもたちを探し続けた。親が泣き叫ぶ姿を見てきた。「二度と同じことを繰り返してはいけない」とあの日から考え続けている。二度と同じこととは災害のことではない。人の命が壊れてはいけないということだ。災害は必ず起きるもの。だから備えなければいけない。その時に、モノは壊れても人の命が壊れてはいけない。災害を止めることはできないが、命の失われ方は変えられるということである。特に子どもたちは、大人が守るべき存在である、その思いで活動を続けている。世間からは「仕方がないことだ」と言われたが、助かる命だったと思っている。保護者たちは、責任の

追及ではなく、あの時何が起きたのかを知るために検証を始めた。その結果、津波情報は防災無線やラジオ、広報車で伝えられ、迎えに来た保護者も避難を促していたこと、授業で使っていた裏山や待機していたスクールバスなど避難手段もあったことが分かった。しかし学校の判断ができず動けなかった。教育委員会は津波を想定した3次避難場所の設定と訓練を指示していたが学校では実施されていなかった。宮城県沖地震の高い発生確率は知られていたにもかかわらず訓練が行われず、結果として行動できなかったのである。1度でも訓練していれば避難の判断は可能だったはずである。

(7) 訓練と事前想定的重要性

伝えたいのは訓練の重要性である。災害時に行動できるかは事前の訓練で決まり、行っていなければ避難先やルートが分からず行動が遅れる。面倒でも訓練に参加し、安全な場所を確認する必要がある。私は専門家ではないが教材を作り子どもたちへ指導を続けており、大川小学校には全国から学生が訪れ災害を学んでいる。災害には地域差はあるが、大雨・強風・台風・地震などどこでも起きる。私にとって地震は常に津波と結び付く。地震後に何が起きるかを事前に想定することが行動の速さを左右し、山崩れや堤防決壊を考えるだけでも判断は変わる。台風や大雨も同様で、警報後ではなく事前に避難先を決めておくことが重要である。「起きたら逃げる」だけでは不十分であり、逃げられない人もいるため、起きそうな段階での早期避難が必要である。ハザードマップを確認し浸水想定や避難場所を理解したうえで、「万が一、もしかして」を前提に行動することが重要である。

(8) 3つのS (エス)

震災から学んだ教訓として、「3つのS」を紹介する。「1つ目はスイッチ」、すなわち逃げるスイッチである。大人は「これまで大丈夫だった」という根拠のない安心感により避難を遅らせる傾向がある。一方で子どもは恐怖を感じれば動物的本能で行動する。この差が避難の遅れにつながる。問題となるのが正常性バイアスと同調性バイアスである。正常性バイアスは「大丈夫だ」と思い込み危険を過小評価する心理であり、同調性バイアスは周囲の行動に合わせてしまう心理である。誰かが逃げないと自分も逃げないという状況が生まれ、結果として避難が遅れる。重要なのは自分から避難することである。自分が助かることで他者を助けることができる。したがってバイアスを自覚し、「万が一、もしかして」を基準に行動する必要がある。「2つ目はセーフ」、安全な場所の確保である。大川小学校では安全な避難場所が決められておらず、訓練も十分ではなかった。その結果として判断が遅れた。学校、企業、地域すべてで訓練

を実施する必要がある。「3つ目はセーブ」である。警報が解除されるまで戻らないこと。

(9)語り部活動と伝承の意味

私が語り部活動を続ける理由は、二度とあの時のような子供たちの姿を見たくないからだ。東日本大震災はいずれ教科書に載り、歴史の1ページになると思うが、これは過去の出来事ではなく、また起きると考えてほしいと思う。15年が経過しても思いは変わらない。家族や地域を失った現実と向き合い続けている。「乗り越える」という言葉ではなく、向き合い続けることが必要だと考えている。娘は12歳で亡くなった。夢に出てくる姿も12歳のままである。本来なら27歳になっているが、その姿は想像できない。それでもその記憶と共に生きていく。

(10)ハザードマップの読み方と未来への課題

各地域で配布されるハザードマップは重要な資料であるが、必ずしも正しいとは限らない。疑問があれば行政に確認し、地域で共有することが防災意識の向上につながる。浸水想定が深い地域では、より高い場所への避難を考える必要がある。1キロの移動時間を把握すること自体が訓練となり、地震から津波到達までの時間を踏まえて間に合うか事前に検討することが重要である。また橋はリスクとなり得るため、津波の遡上や地形・構造物の影響を想像することが求められる。大川小学校では周辺が浸水想定に含まれておらず安全と見なされた結果、避難が遅れた。この経験から、ハザードマップを絶対視せず自分自身のハザードマップを作ってみてほしい。

(11)最後に

現在語り部の中心は60歳前後の人たちであり、次世代がない。そのため東北大学と連携し学生たちに語り継ぐ活動を始めている。また外国からの来訪者に向けて英語での語り部も実施しており、形を変えながら震災で起きたことを伝え続けている。



開催地より

先日は、貴重な防災講演会を開催していただき、誠にありがとうございました。東日本大震災の被災地、石巻市大川小学校での出来事、その生の声を新冠町で拝聴できたことは、私たち自治体職員にとっても、また地域の住民にとっても、極めて意義深い機会となりました。

特に印象に残ったのは、「正常性バイアス」の恐ろしさです。学校管理下という、安全であるはずの場所でなぜ悲劇が起きたのか。そのプロセスを詳細に伺うことで、私たち行政が作成するマニュアルや訓練が、いざという時に本当に機能するのか、改めて点検する必要性を強く突きつけられました。

また、講師の方が新冠町のハザードマップや海溝型地震のリスクについても具体的に触れてくださった点は、非常に効果的でした。大川小学校の事例（河川遡上や橋の影響）を、新冠川を有する私たちの町に置き換えて考えることができ、参加者全員が「対岸の火事」ではなく「自分事」として危機感を共有できたと思います。

講演で教えていただいた「Switch（避難への切り替え）」「Safe（安全な場所の確認）」「Save（命を守り続ける）」という合言葉は、今後の町の防災啓発活動における重要な指針となります。ただ恐れるだけでなく、具体的にどう動けば助かるのかを示していただいたことは、今後の防災行政を進める上で大きな財産となりました。

本講演で得た教訓を一過性のものとせず、今後の新冠町の防災対策や住民への意識啓発にしっかりと反映させていく所存です。